



カントウータ

Cantuta

No. 32



ラパス、ムリーリョ広場の国会議事堂の「逆回り時計」
(撮影者 椿 秀洋)

- 1 「石見銀山遺跡とその文化景観」世界遺産登録10周年記念
—銀が世界を変えた—の開催を振り返って 田 原 淳 史
- 2 トウパク・カタリの反乱について 真 鍋 周 三
- 3 ボリビア・アマゾンの暮らし 河 田 菜 摘
- 4-1 忘れられない記憶を残した旅 (上) ヒメナ・ナガシロ
- 4-2 Viajes que crearon recuerdos inolvidables (Primera parte)
Ximena Nagashiro

1. 「石見銀山遺跡とその文化景観」世界遺産登録10周年記念—銀が世界を変えた—の開催を振り返って

島根県文化財課

田原 淳史

石見銀山展の開催

2017年夏、7月14日から9月3日までの52日間、島根県にある島根県立古代出雲歴史博物館と石見銀山資料館において、「石見銀山遺跡とその文化的景観」世界遺産登録10周年記念—銀が世界を変えた—という特別展が開催された。そしてこの中で、石見銀山に関する展示とともにボリビアが誇るポトシ銀山の紹介もあわせて行われた。「なぜ、石見銀山展でポトシ銀山か?」と思われる方もいるかもしれない。実は石見銀山とポトシ銀山はともに16世紀の、大航海時代ともいわれる時代に開発された当時において世界屈指の代表的銀鉱山であった。この時代、東アジア海域内では活発な交易活動が行われるとともに、スペインやポルトガルも各地に乗り出し、人と物の動きが世界規模で活発になっていった。そこで大きな役割を果たしたのが「銀」であり、その銀の多くは日本の石見銀山とポトシ銀山で産出したものであった。近年では、日本とボリビアの銀が世界を席卷したこの時代をグローバル化の始まりと捉える研究者もいる。

現在、2つの鉱山は世界史的重要性から世界文化遺産に登録されている。(ちなみにポトシ銀山は石見銀山が世界遺産に登録されるより20年も前の1987年に世界遺産に登録された)

今回の展覧会は、石見銀山の世界遺産登録10周年を記念するとともに、石見銀山とポトシ銀山が果たした世界史上の役割とその意義を広く日本の多くの方々に知ってもらうことが目的の一つであった。

さまざまなハードル

2015年7月のある朝、私は同僚とともにボリビアの首都ラパスのエル・アルトの空港に降り立った。もちろん目的は今回の特別展に、ポトシ関連の文化財を展示するための協力をボリビアの関係当局から得るた



写真1-1 カサ ナショナル デ モネダ



写真1-2 石見銀山展ポスター

めであった。4000mを超える高地に立つのはもちろん初めての経験である。事前に聞いてはいたものの、やはり空気の薄さを体感したことを覚えている。

私たちが目指したのはポトシにあるカサ・ナショナル・デ・モネダ(国立貨幣博物館)。ポトシ銀山関連の文化財は主にここに所蔵・展示されており、とにかく直接お話しして我々の計画を理解してもらう必要があった。

空港に到着後一路ポトシへ向かったが、ここで想定外の出来事に遭遇することになる。ボリビアではよくあることらしいのだが、ブロッケオ(地域の住民や団体による中央・地方政府の政治や政策に対する抗議行動としての道路封鎖)に巻き込まれたのだ。海外でもいろいろな経験をしたが、この手の道路封鎖に巻き込まれるのは初めてだった。後で聞くと、ボリビアでも例

を見ない大規模なブロッケオだったようだ。なんとか辿り着いたポトシ市はその強い影響下にあり、同行して頂いていたボリビア在住の日本人の方に可能な限りの働きかけをしてもらったものの、結局博物館の関係者に会うことは叶わず、主目的を十分果たせないまま帰国するという憂き目を見ることとなった。ただ、このブロッケオを始めとする初回の様々な経験が、その後の困難を乗り越えるうえでの糧になったような気もしている。

さて、その後2016年の2度目の訪問では無事に博物館関係者とも協議をすることができ、開催に向けて動き始めることができた。これですべてが順調に推移すると考えたが実はまだ甘かった。カサ・ナショナル・デ・モネダ所蔵の文化財・美術品は、それを管轄するボリビア中央銀行財団の所有となっており、実際の借用に関する交渉は博物館ではなくその財団と行う必要があることが分かった。したがって、展示品自体の調査はポトシで行い、交渉はラパスで行うということが必要となった。さらに文化財の国外持ち出しには政府の許可も必要で、そのための協力依頼も行う必要があることも分かってきた。窓口となっていたいただいた方は協力的だったが、それでもかなりの時間を要することとなった。驚いたのは必要な手続き・書類の多さである。日本も書類の多さでは世界でトップクラスと思っていたが、スペイン語で作成する必要もあり、ボリビアで必要な書類手続きは予想を大きく超えていた。これに加え、もう一つ我々を悩ませたのが、手続きがはっきりと定まっていなかったことである。そのためか各機関のいうことが少しずつ異なっており、混乱する場面もあった。予想以上に手続きに時間がかかる。その一方で開催日は近づいてくる。次第に焦りを強くしていったが、関係者の方々のご尽力によりなんとか開催に間に合うように展示品が、ボリビアのポトシから、日本の島根まで届けられ、ひと安心したことが思い出される。

今後への期待

さまざまな困難を乗り越えて開催した展覧会であ

ったが、約37,000人と予想を超える多数の方に来場をいただいた。感想を伺うと、「ポトシ銀山を知ることができて良かった、2つの銀山の重要性が良く分かった」などの声が聞かれた。



写真1-3 会場の様子

日本で世界史の教科書には乗っているものの、なかなかイメージがわからない国やその遺産について、今回の具体的な展示品を通して感じ理解してもらえたのではないかと思っている。また展覧会の開催中には、駐日ボリビア多民族国大使館のアンヘラ・アイリョン駐日臨時代理大使や、椿秀洋前ボリビア大使にもご講演・ご臨席をいただいて、ボリビアという国の魅力を紹介して頂いた。参加者された県民など多くの方々にボリビアに触れてもらう良い機会となった。

近年、ウユニ塩湖を訪れる日本人旅行者が多いと聞く。ボリビアと言えばウユニ塩湖というイメージをもっている日本人がほとんどであろう。しかしボリビアには16世紀半から銀の産出が始まり、貨幣資源としての銀の大量輸出を通じて当時の世界に大きな経済的・政治的影響を与えたポトシ銀山もある。この石見銀山とポトシ銀山の二つに歴史的な鉱山の間にも生まれた「奇しきご縁」を、さらに少しでも発展させていくことができればという思いを、展覧会を終えた今胸に抱いている。

今回の展覧会の開催に際しては、駐日ボリビア多民族国大使館、日本ボリビア協会をはじめ、在ボリビア日本国大使館、ボリビア多民族国文化観光省、ボリビア中央銀行財団、カサ・ナショナル・デ・モネダ、ボ

リビア日系協会連合会に多大なるご協力をいただきました。特に、出合美樹さん、加藤亜衣さん、岡村優子さん、佐藤信壽さんには現地において大変お世話になりました。末筆ながらお礼申し上げます。

(終わり)

2. トウパック・カタリの反乱について

兵庫県立大学名誉教授

真鍋 周三

18世紀になるとアルトペルー*¹において先住民による反乱・蜂起が連続的に発生していた。反乱は直接的には、貢納（王権が共同体の18歳から50歳までの先住民成年男子に一律に課した税）と、ミタ*²、レパルティミエント*³が背景になっている。それから植民地社会全体に影響を与えた要因として、スペインのカルロス3世によるラプラタ副王領の新設、新税の創出、販売税の値上げ、自由貿易政策、大衆消費財への販売税課税などからなるブルボン改革（1763-87年）の影響も見逃せない。

中でも、1777年以降の現ボリビア南部のポトシ市北方に位置したチャヤンタ地方におけるカシケ（先住民共同体の首長）のトマス・カタリ（Tomás Catari/ Katari. 1740- 1781）の遵法闘争はよく知られている。1780年6月の武力闘争を契機に、この先住民の抵抗運動は単一の地方に留まらず、アルトペルーの南部一帯に拡大し始める。1781年1月トマス・カタリが殺害された頃から、アルトペルー北部もまた反乱状態となり、「カタリ」の名は一段とカリスマ性を発揮することになった。

トウパック・カタリ〔Túpac Katari (Catari) (Tupaj Katari) . 1750-1781〕ことフリアン・アパサ（Julián Apaza）は、アルトペルーのシカシカ地方アヨアヨ生まれのアイマラ先住民であり、コヤオ*⁴の先住民を率いて、当時のスペインの支配に対して反乱を指揮した人物である（1781年11月15日、四つ裂きの刑に処せられた）。彼の父

親はポトシ銀山の鉱夫として強制労働に従事し死亡。孤児となったフリアン・アパサは、その後「鐘突き」として司祭の仕事を手伝う。またボリビアのオルロ鉱山（銀山）でペオン（労務者）つまり採鉱夫・鉱石搬出夫として2年働いた。そこで先住民の苦悩を体験する。その後、シカシカに戻りパン職人となり、人生の伴侶となるバルトリーナ・シサと出会い結婚する。その後、4人の子供（3男1女）に恵まれる。1772年からラパス市までの区間を掌中におさめ小売商としてコカ、ベーズ（織物）、ぶどう酒の輸送や販売に従事する。その過程で、先住民、メスティソ（先住民と白人の混血）、チョロ（スペイン人によって開化された先住民）の考え方に触れる。植民地支配者による搾取に対してアイマラ先住民を主とする被支配者の不満の高まりを目撃する。妻バルトリーナならびに妹のグレゴリアとともに権力に立ち向かう決心を固める。



図2-1 同歴史書に描かれているバルトリーナ・シサのイラスト



図2-2 ボリビアの国民的歴史書に描かれているトウパック・カタリのイラスト

インカの家系に属し、現ペルー・クスコ県に位置するクスコ地域で蜂起して、ティンタ地方のトゥングスカ、パンパマルカ、スリマナ3村のカシケであったトゥパック・アマル(2世)(Túpac Amaru II. 1738-1781. 本名ホセ・ガブリエル・コンドルカンキ)と、チャヤンタ地方において抵抗運動を展開したカシケ、トマス・カタリのそれぞれの名前の一部をとってトゥパック・カタリと名乗るようになった。

ところで、ラパス市包囲戦(1781年3月~10月)において頂点に達するトゥパック・カタリの反乱はトゥパック・アマルの反乱とは性格的にだいぶ異なっていた。トゥパック・カタリはトゥパック・アマルとは異なり、平民の先住民であり、カシケではなかった。また読み書きはできなかった。トゥパック・アマルの反乱軍では白人から先住民・黒人に至るまでの多様な人々(ケチュア先住民が多く含まれはしたが、社会階層も多様であった)が統合されていたのに対し、トゥパック・カタリの反乱軍ではアイマラ先住民大衆が主力であり、社会階層的にも先住民平民が中心であった。

クスコ市包囲戦(1780年12月28日~翌81年1月10日頃)の後、トゥパック・アマル軍の拠点はクスコ司教区南部に移って行き、やがてアサンガロ(現ペルー領・ティティカカ湖北方に位置する)に反乱軍の司令部が置かれることになる。トゥパック・アマルを含めて多くの指導者が1781年4月ティンタ地方南部のランギ村において逮捕された後、反乱軍を率いたのはディエゴ・クリストバル(トゥパック・アマルの従弟)を中心とするトゥパック・アマルの一族であった(以下、「トゥパック・アマルの旗の下に結集した反乱者」という意味で“tupamarista”と原語表記する)。そして戦いの舞台は南のアルトペルーにまで伸びていく。

クスコとポトシを結ぶ幹線道沿いにあるプーノ(現ペルー領)は交通の要衝、商業の中心地であった。1781年5月9日、ディエゴ・クリストバル

とマリアノ(トゥパック・アマルの第二子)が率いるtupamaristaはプーノの包囲戦に加わった。

(ここでもトゥパック・カタリ軍が1781年2月から包囲戦を展開していた)。つまりプーノで、北方からやってきたトゥパック・アマル軍と、南から到着していたトゥパック・カタリ軍(ラパス包囲戦の途中)とが合流したわけである。5月26日プーノは反乱軍の手に落ちた。

その一方で、5月4日、アンドレス・メンディグレ(トゥパック・アマルの甥)やミゲル・バスティダス(トゥパック・アマルの妻ミカエラ・バスティダスの親族)が率いるtupamaristaはティティカカ湖東岸ラレカハ地方のソラタ(現ボリビア領)を包囲・攻撃する。8月5日、反乱軍はここでも勝利を収め、ソラタは陥落した。これに続いてtupamaristaはラパス市に向かう。1781年3月31日以降ラパス市ではトゥパック・カタリ軍によってその包囲戦が行われており、8月11日、アンドレスの軍がこれに合流するのである。

ところで、アルトペルー方面では、トゥパック・アマルの反乱から後にトゥパック・カタリと名乗るフリアン・アパサの登場にいたるまでの時期、tupamaristaに同調しようとする動きがあった。例えば、1780年11月、フワイ(現アルゼンチン領)で配られたビラには、「税関が廃止されなければ.....トゥパック・アマルをわれわれの国王、君主として奉じよう」「トゥパック・アマルの旗の下に参加する覚悟だ.....」とある。また1781年2月、オルロ(現ボリビア領)の反乱者ハシントは先住民にむかって、「あなたがたの国王トゥパック・アマル.....」と語りかけている。また同年2月から3月にかけて、コチャバンバの反乱者は、トゥパック・アマルを彼らの指導者、国王、君主と宣言したのであった。こうした現象はチチャスやトゥピサ(現ボリビア領)をはじめ各地でみられた。そしてフリアン・アパサは(反乱を起こす以前)数度にわたってティンタ地方トゥングスカを訪れ、トゥパック・アマルに教えを請うていたといわれて

いる。

ところが、プーノに続いてチュクィートやラパスなどにおいてアルトペルーの反乱勢力が tupamarista と接触した場所では、両者の関係はうまくいっていない。対立や衝突が生じているのである。とくにラパス包囲戦に結集したトゥパック・カタリの反乱軍との間に軋轢が生じたことはよく知られている。例えば、ラパス包囲戦の後半においてカラバヤ（現ペルー・プーノ県）出身の先住民はアマル側の tupamarista 側で戦い、パカヘスの先住民はカタリ側で戦った。また両者の軍事宿営も別々であった。そうした不和の本質的な背景は、先スペイン期以来のこの地域の歴史に起因するのではないだろうか。この点の解明に迫る研究はほとんどみられないが、要因の一つとして考えられるのは両者の文化的基層の相違である。とくにコヤオ地方はもとよりアルトペルーの大半がかつてプレ・インカ時代にティワナク文化圏に所属していたという地域的条件が想起される。

トゥパック・カタリはアイマラの人々の抵抗や自立のシンボルとして、ボリビア近現代を通じてつねに人民の勇気を奮い立たせてきた。2005年7月15日、ボリビアの前暫定大統領エドゥアルド・ロドリゲス・ベルツェは、法令第3102号によってフリアン・アパサとその妻バルトリーナ・シサをアイマラの国民的英雄と（公式に）宣言した。現代のボリビアにおいて「トゥパック・カタリ」の名前は、政党、ゲリラ集団、労働組合、学校などの名前に刻まれている。（終わり）

*1：現ボリビア多民族国（以下、「ボリビア」と略称する）の領域にほぼあたる。

*2：ポトシ銀山（現ボリビア領）等での強制労働。

*3：コレヒドール（地方行政官）がその管轄区の前住民に物品を強制的に割り当て、その代価を強制徴収する方式。

*4：Collao。ラパス市を中心にオマスーヨス、シカシカ、パカヘス、チュクィート、パウカルコーリヤ、ラレカハの地方を指しアイマラの人々が大勢暮らす地域を指す。

3. ボリビア・アマゾン暮らし

ボリビア・ルレナバケ在住

河田 菜摘

大自然と多文化の町ルレナバケ

ラパスの町からさらに山を越えて、霧が立ち込め、デスロードで名高い崖っぷちの危険な山道をぐるぐると数時間下りると、緑鮮やかで、湿度が高く、空気が濃く感じられるアマゾン地帯へと突入する。アマゾン河の支流に当たるベニ河はラパス県とベニ県を隔てる県境となっているが、その河岸にルレナバケという人口約2万人の小さな町がある。15年前、青年海外協力隊の一員としてこの地に初めて降り立った日、緑の熱帯雨林と茶色い河と青い空とのコントラスト、椰子の木と蔓屋根、道端をのんびり歩く牛や豚が生み出す町の素朴感、さらには肌に照りつける日差しと吹き出す汗に、まるで東南アジアの小さな田舎町に辿り着いたような第一印象を受けた。

ルレナバケの周辺はタカナ族、モセテネ族、チマネ族、エセエハ族という少数民族がジャングルの大自然のもとに共生し、近代には日本やヨーロッパからの移民が、またアンデス地方からケチュアやアイマラの民が移り住んできた歴史があり、多文化が入り混ざり、開放的で、高山地方とも低地の他の町ともまた異なる独特の文化が形成されており、とても住み心地がよい町である。

熱帯雨林のジャングルと熱帯湿原のパンパの二つの方面に向かって大自然が広がるアマゾンの入り口に位置することから、小さな観光地としてルレナバケには世界中から多くの旅行者が訪れるが、町の人達は品物やサービスを売りつけようとガツガツと旅行者の周りに集ったりせず、あくまでのんびりとマイペースで毎日を暮らしている。

ジャングル雑貨の店

現地住民の生活上のニーズ調査とその向上に貢献する任務を受けた青年海外協力隊員として、最初の1年は、できるだけたくさんの集落を頻繁に訪れ、自分自身も現地の生活に慣れ、地元の人々に受け入れられ

るよう文化と言葉を学び、そして現状を知ること集中した。2年目によりやく少しずつニーズ調査やものづくり講習会をできるようになったが、思うような成果を残せないうちに任期を終えてしまった。



写真3-1 私の店雑貨店「La Cambita」

しかし、2年間の活動を通じて、ジャングルの自然素材を利用したものづくりが、地元の人たちの生活や意識の向上に繋がる可能性を感じ、やり残したことがあるように感じた私は、任期満了で帰国後、時を置かずして再びルレナバケに単身戻り、改めて地元の人たちに声をかけて雑貨店・カンビータを開いた。ヤシの葉やココナッツの殻、色とりどりの木の实、木片などジャングルの自然素材が、地元の作り手たちにより自然を壊さないエコサイクルの手法で、様々な雑貨やアクセサリへと生み出され、それらが販売されることで現地の人々に貢献すると考えたのである。そうした商品の数々は、私がデザインを提案したものもあるが、基本的には作り手の人たちの好みや創作意欲を尊重するようにしている。また、この活動は、ものづくりという機会の提供が作り手とその家族の経済的・社会的自立にも繋がり、さらに、自然素材を利用することで自分たちが共生している自然環境や文化の知恵を守り、継承していくことにも繋がることを信じて続けている私にとっては、いわば協力隊活動の延長でもある。

出産と子育て

さて、ボランティアとしてではなく自分も組織から

独立してビジネスを始めたことで、事業開始当初こそ価値観の違いなどからくる苦労もあったものの、次第に地元根付いた住民のひとりとして周りから認めてもらえるようになったと思う。

雑貨店の営業が軌道に乗ってきた頃、生活とビジネスを通じて共にパートナーとしてやってきたルレナバケ出身の相方との子どもを授かった。自分が住むこの町で産みたいと電話で日本の両親に伝えると、協力隊を終えた後、再びボリビアに戻ると言ったとき以上に反対された。多くの女性は実家に里帰りして子どもを産むのに、何故日本からはるか遠く、医療の未発達な地で産みたいのか、と両親は心配した。子どもを産むという未経験のこと、一人の命の責任を持つということ、当然私も怖くはなかったといえは嘘になる。しかし、ルレナバケの町が好きでこれまでこの地に足をつけて住んできたのに、出産はより安全な日本で、という考えは私には毛頭なかった。それに、子沢山な習慣が根強いこの田舎町では、日々たくさん子どもたちが生まれており、人間の生命力の強さを信じたい思いもあった。

最終的に両親の理解とサポートも得て、この町の病院で無事に生まれてくれた赤ちゃんを抱っこしながら店頭立っていたりすると、町のみんが優しく声をかけてくれ、これまで以上に地元民に受け入れてもらえたように感じられた。「家族も近くにいない不便な田舎町での子育ては大変でしょう」と言われたりするが、子ども人口が多い田舎町ではみんなが子どもやお母さんに優しく、子どもの少ない日本や他のボリビアの都市部よりもじつは子育てがしやすい環境なのではないかという気がしている。

ジャングルツアー会社

二人目の子どもが歩けるようになってくると、子どもたちの手で触りたいという気持ちを掻き立てるお宝が並ぶ雑貨店の小さなスペースで、子育てをしながら接客をするという環境に限界を感じ、しばらくの間、店の販売は信頼するスタッフたちに任せることにした。その後ご縁があつて、この町の旅行会社でジャン

グルツアーを案内・販売する仕事を始め、雑貨店とともに経営に携わっている。



写真3-2 ジャングルの大木

前述のように、ルレナバケは世界各地から旅人が大自然との触れ合いを求めて訪れる観光地である。毎日国籍も言葉も個性も違う旅行者たちと交流できる刺激もあり、週末にはツアー視察も兼ねて家族でジャングル散策に出かけられるという役得もあり、親子で今の環境を大いに楽しませてもらっている。

また、アマゾンの熱帯雨林は、焼畑や製材、牧場や道路やダム建設など人間のエゴによって年々想像もつかない速さで壊されて続けているが、エコツーリズムは自然を破壊せずに地域の振興に繋がる道であり、アマゾンの大自然を愛する一市民としては、大規模な観光産業や都市開発、天然資源開発の波に流されず、自然を敬う「小さな観光地」という町の姿がいつまでも変わらないでくれることを心から願い、その一端に貢献できることを嬉しく思っている。

日系ソサエティの活動

戦前にペルーへと渡ってきた日本人の一部に、アマゾン河源流を下ってボリビアとブラジル国境へ移動し、さらにルレナバケ周辺へと移り渡ってきた人たちがいた。ルレナバケにきた当初に招待された日系一世、二世の方たちの昼食会でこのような話を耳にして感銘を受けた。しかし、日系人の若者世代と知り合うと、日本に出稼ぎに行きたい野心は持っているが、正直

なところ自分のルーツの一つでもある日本の文化に純粹に興味がある人は少ないように思えた。

それでも過去に何度か出稼ぎ希望の日系人家族に頼まれて日本語教室を開いたこともあるのだが、仕事やら体調やら悪天候などありふれた言い訳を作ってはドタキャンされたり、下手したら未連絡のまま来なくなったりと、とにかくまともに続いた試しがない。大体が日系人に限らずこの辺りのアマゾン育ちは、豊かな自然の下で為すがままに生きてきたためか、呆れるほど努力をしないし、諦めも早い。



写真3-3 ルレナバケ日本人会の人々

そんなことで、現地の日系人とは道で会ったら挨拶する程度の浅い関係だったのだが、ちょうど一年ほど前に、沖縄出身の日系三世である女性からある相談を持ちかけられた。彼女は出稼ぎで日本に十数年住んでいたことがあり日本語が話せるが、日本で生まれた娘は5歳でボリビアに来たので、10代半ばの今はもうまったく日本語が話せず、「ママが教えてくれなかったから！」と泣いて怒られたと言う。

一方の私も、この小さな町で現在2人の男子を育てており、二カ国の言葉や文化を跨いだ母と子の関係を人ごととは思えない。これまで私は子どもたちを家庭内では日本語で育ててきているが、日本語での会話の相手は普段私しかいないわけで、保育園に入れてしばらくすると長男の口から出るのはスペイン語ばかりになった。それでも私から長男に徹底して日本語で話しかけ続けるのにはそれなりの意志を必要としたが、5歳にもなると長男は相手によって日本語とスペイン

語を上手に使い分けられるようになった。そうは言っても、ボリビアと日本の両方に縁のある子どもたちが今後アイデンティティに悩むことはきっとあるはずで、そんな時に周りに自分と同じく日本にルーツを持つ友人がいると心強いに違いないと思う。

このような経緯で、私たちは日本とボリビア繋がり
のママ友として意気投合し、次世代のために地元の日系ソサエティを盛り上げるべく、まず皆を集めるきっかけとして昨年七月に第一回ルレナバケ日本祭りを開くことにした。その後も月一回程度、地元の日系家族有志たちで季節の催し、浴衣の着付け、折り紙、習字、日本語などの講習会を開いてみんなで楽しんでいる。

さて、話が多岐に広がってしまったが、雑貨作りから子育て、ジャングルツアー、日系ソサエティの活動まで、今後も楽しみが盛り沢山のボリビアマゾン暮らし、ぜひ下のリンクを一度開いてご覧頂ければ幸いである。 (終わり)

○ボリビアマゾンの手づくり自然雑貨の店ラ・カン
ベータ：www.Facebook.com/LaCambita

○ジャングル・パンパツアー：
www.Facebook.com/MaxJungle

○ルレナバケ日本文化協会：
www.Facebook.com/ClubBolivianoJaponesRbgSbv

4. 忘れられない記憶を残した旅 (上)

ヒメナ・ナガシロ
法学学士

子供たちが小さい頃、私たちはボリビアに住んでいました。休暇や祝日には、他の場所について学び知るためだけではなく、家族の思い出を作るために国の内外を旅行したものです。

年末の旅行は夏休み中ということもあって一番長いものでした。主にビーチや海がある近隣の国に行きました。十二月のクリスマスが終わると私たちは冒険を始めました。夫は予約なしで旅行をするのが大好き

で、長距離を運転するなら尚更良いという人でした。ボリビアは南米の中心にあるので、隣接している全ての国に行くことができました。当時住んでいた所から近いチリ北部とペルー南部の沿岸は、長い祝日のときには何度も目的地になりました。

沿岸部まで行くには何千キロも走らなければなりません。チュンガラ湖への道を経由してアンデス山脈を横切り、それからチリのアリカやイキケのビーチに着くまでアタカマ砂漠に沿って下るのです。海を実際に知ることは娘にとって特別なことだったので、何度も行きました。

別の機会には、素晴らしいインカの城塞を見るために、ペルーのマチュピチュに行きました。最初に行ったクスコの街には、スペイン植民時代に建てられたカトリック寺院や建物がまだ残っています。そこから、美しい風景を見ながら列車でマチュピチュの遺跡まで登りました。

ある年の夏には、ブラジルとアルゼンチンの間にあるユネスコ世界遺産のイグアスの滝を訪ねました。パラグアイの首都アスンシオンに着いてから、フォス・ド・イグアスやプエルト・イグアスの近くのシウダー・デル・エステまで移動します。プエルト・イグアスは三つの国の国境地帯にあるので三国国境の町と呼ばれています。

最高の場所と言われているブラジル側から滝を見ました。本当に素晴らしい景色で、近くから見て「悪魔の喉笛」と呼ばれる大瀑布を感じるためにアルゼンチン側にも行きました。別の休暇では、ブラジル南岸のサンタ・カタリーナ州とパラナ州あたりに行きました。ビーチは南米の西側とは随分違っていました。もっと緑色で観光客向けでしたが、ビーチの他には小さな町にも行きました。私たちが一番気に入ったのはブルメナウでドイツの町に似ていましたが、湿度は85%あり、まさに燃えるような暑さでした。私たちは今まで訪れた場所の中で、ブルメナウとアスンシオンが一番暑い場所だと思っていますが、2013年に訪れた日本の宮崎ではその気温を超えたような気がします。

別の年には、カリブの島でハイチと国境を接してい

るドミニカ共和国を訪れました。もともとは、1492年にアメリカを「発見」したコロンブスにエスパニョーラ島と名付けられた場所です。車を借りて島を巡り、サント・ドミンゴやプエルト・プラタ、プンタ・カナのビーチ、サマナ、ロス・アイティセス国立公園に行きました。この国で二十世紀半ばに起きた政治的・社会的事件はペルーのノーベル賞作家バルガス・リョサの小説『チボの狂宴』の中で見事に描かれています。

南米に話を戻しますが、チリのサンティアゴへの旅は都心を巡るものでした。首都の街角や、造幣局、サンタ・ルシアの丘、ラス・コンデスの市議会、街の奥の雪をかぶった山脈などの最も有名な場所を見ました。

しかし、私たちにとって一番興味深かった場所は、チリの詩人パブロ・ネルーダの家でした。彼もノーベル文学賞を受賞しており、「秋の遺言」という詩は比類ない作品だと思います。それから南へ向い、有名で海が目にも鮮やかなヴィニャ・デル・マルに行きました。毎年二月に行われる音楽祭が知られています。

アルゼンチンのブエノスアイレスは、私たちの旅行の中でも欠かせない場所で、日本に引越す前の最後の旅行でした。街並みは堂々たるもので、中心部はヨーロッパの街に似ていました。建築様式がマドリードやバルセロナ、パリに似ているという人もいます。博物館に足を運ぶ中で、アルゼンチンの名高い詩人ホルヘ・ルイス・ボルヘスの作品の展示に参加するという幸運に恵まれました。彼の遺産は国際財団の長である日系人の未亡人マリア・コダマによって熱心に管理されています。南米のブロードウェイと呼ばれるコリエンテス通りの劇場に行き、様々なショーの中からレス・リュティエスの喜劇を楽しむことができました。

隣国ウルグアイが近かったのでラ・プラタ川を渡ることになりました。首都モンテビデオには、文化が息づいています。ウルグアイ人はラテンアメリカで最も読書をすると言われており、このことは国の英雄であり父であるホセ・アルティガスの「ウルグアイ人よ、名高く勇敢であれ」という1816年の言葉に相応しい振る舞いだといえるでしょう。そうやってビーチを楽しん

だ他にカルロス・パエスの家にも行きました。プンタ・バジェーナにあり海への眺めが素晴らしいこの家は現在は画家の作品を展示する博物館になっています。



写真4-1 ウルグアイ・プエルタバレナのマルドナードにある美術館「カサ・プエブロ」（民家）

私たちの休暇は、日常生活や単調な日々から抜け出すための最高かつ最も待ち望まれた瞬間でした。それは他の国の場所や文化を知る機会を与えてくれるものでしたが、特に家族の絆を深めるためにも役立ちました。会話をするためのより多くの時間を持ったり、過ぎ去った年を評価したり、これからくる年の計画を立てたり、成果や夢、将来の目標について語ったり、日々学び、計画を立て続けるために役立ったのです。それは「家族水入らずで」過ごす時間でした。海外旅行は他の国々を知るための役に立ちましたが、短い休暇でもその国の国土の広がりや、様々な土地柄、植物や動物、習慣、風景、料理などの豊かさを知るのに役立ちました。

世界で最も危険な道の一つを通して旅行したことも何度かあります。その道はコロイコやチュルマニ、カラナビなどの町があるユンガス地方にあります。美しいルレナバケ町を通してアマゾンへの入り口へと北上しマディディ国立公園を訪れたり、水量豊かなベニ川で船に乗ったり、森の中を歩いて色鮮やかな羽を持つ鳥のパラバを見たり、新鮮な魚を食べたり、ガイドの語る歴史や案内に耳を傾けた、りしました。

マディディ地方のジャングルでは、実際にひとりの外国人観光客が遭難しましたが、多くの逆境を乗り越えてジャングルから抜け出すことに成功した彼は『ジャングル』という小説の中で波乱万丈の体験を語りベストセラーになりました。とても興味深い物語で、最近になって『ハリー・ポッター』シリーズの主人公を演じたダニエル・ラドグリフ主演で同名の映画が作られました。

毎年のように広大な国内を巡るなかで、北部のベニ県やその首都トリニダを訪れました。熱帯性の湿度の高い気候で二十世紀の最初には日系移民がやってきました。父方の祖父もその一人であり、母方の祖父はラパス市に移りました。トリニダまで行くのにはサンタクルスから街道に入り、広大な緑の平原を横切りました。肉体的にはしんどかったもののとても面白い旅でした。ビーチがなかったので街を囲む潟湖で涼みました。

県都のサンタクルス市にはしばしば行きましたが、地方にはイエスズ会の教会を訪ねて一度だけ行ったほか、チャネやインカの文化遺跡サマイパタの砦を訪れました。ボリビア中央部に位置し、国内で最良の気候と美味しい食事を持つコチャバンバ県では、最も代表的な建造物であるコンコルディアのキリスト像を見に行きました。リオデジャネイロのキリスト像に似ていますがさらに大きいものです。

欠かすことのできなかった素晴らしい目的地のウユニ塩湖は、私の国ボリビアの代表的なイメージとなり世界的にも知られています。ポトシ銀山や元造幣局のある鉱業が盛んなポトシ県に位置しています。

ウユニ塩湖について話すためには、一段落割く価値があります。10,582平方キロメートルある世界最大の素晴らしい塩湖です。湖の中にはイスラ・デル・ペスカド島があり、私たちはそこで散策したり、別の惑星のような美しい風景を楽しみながら休息したりしました。まさに塩の海です。あまりにも美しく驚異的なこの場所では、数々の大作映画の撮影が行われてきました。有名な作品は、「スター・ウォーズ 最後のジェダイ」や、ジェームズ・ボンドの「007 慰めの報



写真4-2 ボリビア・コルチャニのウユニ塩湖の入口

酬」などです。

そしてブドウ農園の地タリハは、ボリビア南部のグアダルキビル川沿いに位置しており、スペインに同名の川があります。ボリビアのアンダルシアとして知られている街で、道を進んでいくとアルゼンチンとの国境にあるベルメホ市に着きます。海拔3,640メートルのラパスから、海拔609メートルにある南端のベルメホまで街道を行く旅をしたことが一度あります。長旅でしたが感動と発見に満ちたものでした。往復2,160キロメートルの、美しい景色が続く行程でした。

私たちの旅行はエピソードが沢山あり、それぞれの旅ごとに固有の趣がありました。野原で野営しヴァン・ゴッホのキャンパスのような星空を眺めたときのことを、懐かしさとともに思い出します。そして、火星のような風景を見たことを。不安定なボートに乗りタイタニックのような事故が起きないようにと祈ったことを。城塞を巡り黒沢の映画に入り込んだかのように想像することを。滝の下にいるのに大雨まで降ってきて、映画「ラスト・オブ・モヒカン」のワンシーンのように感じたこと、などを思い出します。

ちょっとした災難も幾つかありました。私たちの車のタイヤが外れて前を転がっていくのを目にしたことがありましたし、ホテルが見つけれずにジャガイモ袋を敷いて寝なければいけなかったこともありました。また、夜に高原の真ん中や、塩湖の中で塩気のせいで羅針盤の動きが変わってしまい道に迷ったこともありました。車の鍵を潟湖でなくし見つけ出した

こともありました。あるときは深夜にペルーとの国境を越えなければならず、スパイ映画のように私と娘は二輪馬車に乗り、夫と息子は護衛のように走ったこともありました。

それでも、大方の旅は楽しく笑い合ったり、まるで喜劇のような時間でした。夫と幼い娘と一緒に入念に支度をして鱒を釣りに行った時、娘は釣った魚を水に返してやってほしいといって泣き出してしまい、その通りにしなければなりません。野宿をした時、岩の上にテントを張ってしまい眠れなかったこともありました。娘が二歳の時どうにかして砂の上に文字を書こうとしたこともありました。息子のために旅行仲間を探してやったこともありました。田舎の方で食事に兎を出されたので、息子には鶏だと言わなければいけなかったこともありました。

これらの旅行の中で、たくさんの忘れがたい思い出を、私たちの家族の歴史とも言える思い出を作りました。曲がりくねった道路や蛇行する道、様々な高度や気候を経験しました。ジャングルや山、高原、砂漠、雪に覆われた場所、塩湖、大都市や小さな村にも行きました。船で海や川、湖を進みました。休火山にも登りました。河口や滝、洞窟にも行きましたが、まだまだ他にも行っていない場所が沢山あると思います。

(つづく)

4-2 Viajes que crearon recuerdos inolvidables (Primera parte)

**Por: Ximena Nagashiro
Licenciada en Derecho**

Cuando mis hijos eran menores vivíamos en Bolivia, y en familia aprovechábamos las vacaciones y días festivos para viajar dentro del país y también al exterior, con la idea de crear recuerdos familiares, además de conocer y aprender sobre otros lugares.

En los viajes de fin de año, que eran los más largos por las vacaciones de verano, íbamos a

conocer los países vecinos, principalmente a lugares donde había playa y mar. En diciembre después de celebrar la Navidad emprendíamos nuestra aventura. Mi esposo era un entusiasta de los viajes sin reserva, y aún mejor si conducía por larguísimas carreteras.

Como Bolivia está ubicada en el corazón de Sudamérica, pudimos viajar a todos los países vecinos. Empezamos por las costas del norte de Chile y sur del Perú, que por estar muy cerca de donde vivíamos, se hicieron destinos recurrentes en feriados largos.

Para llegar hasta la costa teníamos que recorrer miles de kilómetros, atravesar la cordillera de Los Andes en el paso de Chungará, y luego descender por el desierto de Atacama hasta alcanzar las playas de Arica e Iquique en Chile.

Conocer el mar fue especial para mi hija así que regresamos allí varias veces.

En otra ocasión fuimos a Machu Pichu, Perú, a conocer esa maravillosa ciudadela incaica. Primero, llegamos a la ciudad de Cuzco. Nuestras vacaciones eran los mejores momentos y los más esperados para salir de la rutina y monotonía de lo cotidiano. Nos ofrecían la oportunidad de conocer lugares y culturas de otros países, pero sobre todo, servían para estrechar lazos familiares, tener más tiempo para conversar, evaluar el año que había pasado, hacer planes para el próximo, hablar de nuestros logros y sueños, de nuestros propósitos para el futuro, de seguir aprendiendo cada día, de seguir haciendo planes.

Eran “nuestro tiempo juntos” solo de la familia, los viajes al exterior nos servían para conocer otros países, pero las vacaciones cortas nos servían para conocer nuestro propio país,

grande en extensión y rico también en lugares, flora, fauna, costumbres, paisajes y gastronomía.

Intentamos conocer la mayor parte de Bolivia, primero los pueblitos del departamento de La Paz. La capital tiene el mismo nombre y es la principal ciudad del país. Muy cercana se encuentra la ciudad de El Alto, llamada así por encontrarse a 4.150 metros sobre el nivel del mar. Nos desplazamos a infinidad de lugares, siendo los más conocidos y turísticos el lago Titicaca con el pueblo de Copacabana siguiendo a Desaguadero frontera con Perú y que es puerta de ingreso de los turistas que provienen del Cuzco. O pueblos como Viacha que conducen a la carretera internacional con destino a Chile.

También viajamos mucho por una de las carreteras más peligrosas del mundo a la zona de Los Yungas, a poblados como Coroico, Chulumani o Caranavi, y continuando al norte hacia la entrada al Amazonas por el bello pueblo de Rurrenabaque con visitas al Parque Nacional Madidi, navegando el caudaloso río Beni para luego caminar en medio del bosque, observar a las parabas, aves de colorido plumaje, así como también comer pescado fresco y escuchar atentos las historias e indicaciones del guía.

En la selvática región del Madidi, en la vida real, se perdió un turista extranjero, que después de muchas vicisitudes logró salir de la jungla. El turista escribió el libro *Jungle* donde cuenta sus peripecias, el cual pasó a convertirse un *best seller*.

Era tan interesante su relato que recientemente se filmó la película homónima con el actor Daniel Radcliffe, protagonista de la serie de *Harry Potter*.

Recorrimos en todos esos años la amplia

geografía de Bolivia, desde el norte la zona del Beni con su capital Trinidad, de clima tropical húmedo. Este fue el lugar al que llegaron ciudadanos japoneses en las primeras décadas del siglo XX, como lo fue el caso de mi abuelo paterno. Mi abuelo materno llegó a la ciudad de La Paz.

Para llegar hasta Trinidad, tomamos la carretera desde Santa Cruz, y atravesamos extensas y verdes llanuras.

El viaje fue agotador pero realmente muy divertido. A falta de playas, nos refrescamos en las lagunas que rodean la ciudad.

A la ciudad de Santa Cruz fuimos varias veces, pero solo una vez pasamos a las provincias a visitar las iglesias de las Misiones Jesuíticas y el Fuerte de Samaipata, este último conserva vestigios de las culturas Chané e Incaica.

En Cochabamba, departamento ubicado al centro de Bolivia y que tiene el mejor clima del país visitamos su monumento más representativo, que es una enorme estatua denominada Cristo de la Concordia, similar al Cristo Redentor de Río de Janeiro pero de mayor tamaño.

Un lugar espectacular que no faltó visitar fue el famoso Salar de Uyuni, convertido en ícono de mi país y reconocido a nivel mundial. Está ubicado en el departamento de Potosí, región minera que cuenta también con el Cerro de Potosí y la Casa de la Moneda. Hablar del Salar de Uyuni merece un párrafo aparte. Es una maravilla natural con una extensión de 10.582 km² el más grande del mundo. En medio del salar se encuentra la isla del Pescado desde donde admiramos el bello paisaje que parece de otro planeta. Un mar de sal. Es tan hermoso e impactante que ha sido locación de grandes

películas, estando entre las más conocidas, *El último Jedi* de la saga La Guerra de las Galaxias y *Quantum of Solace* de James Bond.

También pasamos por Tarja, tierra de viñedos, ubicada al sur del país a orillas del río Guadalquivir, de símil nombre a un río de España y que le da su identidad. Se la conoce como la Andalucía boliviana.

Continuando por carretera llegamos a la ciudad de Bermejo frontera con Argentina.

Cierta vez, realizamos el viaje en carretera desde La Paz que está a una altura de 3.640 metros sobre el nivel del mar, hasta el extremo sur que es Bermejo que queda a 609 m.s.n.m. Fue un viaje largo pero lleno de emociones y descubrimientos. Los paisajes bellísimos en un recorrido de 2.160 kilómetros de ida y vuelta.

Nuestros viajes estaban llenos de anécdotas y cada uno tenía, por supuesto, sus propios matices. Recordamos con nostalgia cuando solíamos acampar en el campo y observar el cielo estrellado cual si fuera un lienzo de Van Gogh. Ver paisajes que parecían de Marte. Subir a lanchas precarias y rezar para que no ocurra lo del *Titanic*. Recorrer los castillos fortalezas e imaginarnos en una película de Kurosawa. Estar bajo unas cataratas al tiempo que comenzaba a llover a cántaros, que daba una sensación como de estar en una escena de la película *El Último Mohicano*.

También tuvimos algunos percances. Una vez vimos pasar rodando por delante la rueda de nuestro propio carro. En otra ocasión no encontramos hotel y tuvimos que dormir encima de unas bolsas que guardaban patatas. O cuando nos perdimos en la noche en pleno altiplano y también en el Salar, cuya salinidad afecta a las brújulas. Ah, y cuando perdimos las

llaves del carro en una laguna, y las logramos encontrar.

Cierta vez a media noche tuvimos que cruzar la frontera con Perú, bajo una lluvia torrencial, mi hija y yo íbamos en una calesa mientras mi esposo y mi hijo corrían como escoltas. Sin embargo la mayoría de las veces, fueron momentos agradables, hilarantes o cómicos. Como cuando nos esmeramos en pescar truchas junto con mi esposo y mi hija, que era muy pequeña, se puso a llorar para que las devolviéramos al agua, petición que tuvimos que cumplir. En una acampada no pudimos dormir porque instalamos la tienda sobre unas piedras. O también cuando ella tenía dos años y pretendía escribir en la playa. O la vez cuando le buscábamos amiguitos de viaje a mi hijo. O cuando en el campo nos sirvieron conejo para comer y le tuve que decir que era pollo.

Sí, en estos viajes creamos muchos momentos memorables, que forman la historia que quisimos para nuestra familia. Estuvimos en carreteras sinuosas, caminos serpenteantes, diferentes altitudes, distintos climas.

Viajamos a la selva, la montaña, la sierra, desiertos, nevados, el salar, ciudades grandes, pueblos chicos. Navegamos en el mar, ríos, lagos. Subimos a volcanes apagados. Estuvimos en estuarios, cataratas y cavernas, y todavía pensamos que nos falta orografía por conocer. (continuar)



写真4-3 ラパス近郊の高地「ラ・クンブレ」(4900m)からの眺望



写真4-6 ウルグアイ・プンタデルエステの海岸にある彫刻「マノ」(手)



写真4-4 「ラ・クンブレ」の雪で雪だるま



写真4-7 ボリビアからチリのアリカをつなぐ国際道路「パタカマヤ・タンボ・ケマード」



写真4-5 ボリビア・サンタクルス州東部・チキタニアのサンハビエル教会

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9 100años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia ②を原典とした西語版、2012 年までを追補 在庫あり
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3 日本人ボリビア移住 100 周年誌 在庫 1 冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12 コロニア・オササキ入植 50 周年記念誌、在庫 1 冊
- ④ 『ラパス日本人会 90 年の記録 1922-2012』 2012-10 在庫 3 冊
統一価格 ①-⑥とも 2500 円(税送料込) ご注文は下記当協会、杉浦までメール又は電話でお名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください
admin@nipponbolivia.org 042-673-3133
お支払は銀行振込でお願い致します。
(口座番号、名義人は発送時ご連絡します)

編集後記

カントウータ 32 号をお送りします。本協会会報誌も 30 号を迎えた時、新しい表紙デザインを公募したところ、何点かご応募をいただきました。会員の小笠原 博様のデザインを採用させていただき、新たな顔で出発し 3 号目となりました。

ボリビアの各地の写真、またはイベントなどの写真を会報誌の表紙としてこれからも発行していきたいと考えています。会員の皆様、読者の皆様の中から、これはという写真がございましたら、是非当協会までお知らせいただければと存じます。

編集委員 白川 光徳 細萱恵子 杉浦 篤

協会関係活動等の近況

- 4 月 1 日：ボリビア・アンサンブル・トリオ来日公演参加 (東京・四谷・絵本塾ホール)
- 4 月 19 日： 駐日ボリビア大使館主催「海の日」のイベント参加 (東京・市ヶ谷、セルバンテス会館)
- 4 月 28 日： Chagas 病検診後援 (鈴鹿市・公民館)
- 5 月 19 日： Chagas 病検診後援 (秦野市・公民館)
- 5 月 29 日： 2018 年度第 1・2 回理事会・定時総会開催 (東京・内幸町・米州開発銀行)
- 6 月 23 日： Chagas 病検診後援 (名古屋市・中川区公民館)

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)